

最後の砦

—規範と論理の必要性—

木下栄蔵 著

四六判 / 150頁 / 定価 1,365円

ISBN 978-4-7687-0338-0

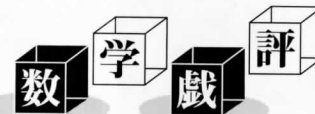
21世紀の初頭において、日本は第4の国難に遭遇しています。それは、新しいネットワーク社会に伴う『パラダイムシフト』を乗り越えるという大きな国難であります。ところで、日本はこのようなパラダイムシフトを過去3度経験しました。一つは、戦国時代から徳川幕府成立までであり、もう一つは幕末維新であり、三つ目は終戦時です。しかし、今回の国難が以前の3回と大きく異なる点は、高度なコンピュータ社会と地球規模のグローバル化の中で起こっている点です。しかも、今の日本には『規範』の概念（この概念こそ今必要なのです）を喪失しています。したがって、『失われた規範』を取り戻し、

21世紀初頭におこる新しいパラダイムシフトを乗り越えるために『規範』の概念が『最後の砦』（本書の題名）になることを信じて、本書をお読みいただければ幸いです。（著者）



◎内容紹介◎

序章 最後の砦という名の規範, 1章 親父という名の規範, 2章 日本社会における規範, 3章 決まる社会における規範, 4章 教育という名の規範, 5章 国家における規範, 6章 規範を支える2つの資本主義の精神, 7章 ORという規範からみた2つの経済学



英語論文考

西山 豊

研究者としての条件は、大学院後期博士課程を修了して学位を持っていること、レフリー付き英語論文があること、海外留学の経験があることだ。若手の研究者ならごく当たり前のことであるが、時代的制約もあるが団塊の世代の私は最近までこれらのどれも無かった。無いとなると欲しくなるもので、かといって簡単に手に入りそうでないことが分かると、そんなもの無くてもよい業績さえあれば何とかなんと自己弁護してしまう。

古い考えに囚われていた私は、この中で英語論文については、2005年度のイギリス留学を機会に大きく変わったのは事実である。それまでは、数学は中身であるので、わざわざ英語に翻訳しなくても日本語で十分だと思っていた。まず、留学を申請するには英語論文が必要である。それは審査する教授が日本語を読めないという単純な理由である。

滞在したのはケンブリッジの数理科学センターであったが、数学教育との関係でミレニアム数学プロジェクト(MMP)に参加し、このグループが発行しているオンライン・マガジン Plus に2つの記事を投稿した。それは本誌での連載記事「数学を楽しむ」の中から「階段のスイッチ」(2005年5月号)と「6174の不思議」(2006年1月号)を翻訳したもので、36号と38号に掲載された。前者はブール代数を、後者はカプレカー数を紹介したものであるが、後者に予期せぬ反響があった。

イギリスから帰国後のこと編集部から、あなたの記事が世界中で読まれているとメールが届く。数学フォーラムやブログに記事が紹介され、Plusのホームページを訪問するカウントが急上昇しているという。本当かなと思って、記事のタイトルである Mysterious Number 6174 と私の名前 Yutaka Nishiyama をキーワードにして検索してみると、英語だけでなくスペイン語、フランス語、ドイツ語、

東欧のハンガリー語などヨーロッパ言語に翻訳されていた。

数ヶ月たって調べてみると、アジア各地でも話題になり、中国語、韓国語、ベトナム語、タイ語などに翻訳されていた。そして、日本語にまで翻訳されているのを知って笑ってしまった。英語で書かれた記事や論文はこういうことかと思った。この記事についてはつぎの URL を参考のこと。

<http://plus.maths.org/issue38/>

[features/nishiyama/](http://plus.maths.org/issue38/features/nishiyama/)

記事が掲載されて2年になるが、最近の動向を調べてみると、アラビア語に翻訳されているのを知った。アラビア語はまったく読めないが、記事のタイトルと私の名前は英文字なので確認できる。また、オーストラリアや南米のブラジルのブログでも引用が見られる。ケンブリッジのオンライン雑誌 Plus に記事が掲載されて2年間でこの話題が世界中を駆け巡ったことになる。

母国語に翻訳することの重要性は、紙製ブーメランの解説書を作るときに感じたことである。世界には公用語とされる言語が77言語あるが、それらの言語に翻訳するには日本語より、英語からのほうが一番効率の良いことが分かった。

<http://www.kbn3.com/bip/index2.html>

数学研究や数学教育での話題についても母国語に翻訳されることが大切である。英語は世界共通語としての性格を持っているので、研究論文や記事を世界中の人に読んで欲しいと望むなら、まず英語に翻訳しておくことだ。また、論文が日本語で書かれていたため審査委員の目に触れずノーベル化学賞を取りそこねたという前例も忘れてはならない。

(にしやま ゆたか / 大阪経済大学)